土木の存在、事業の意義、さらに技術者の思いをどう発信するか

「LRRI 会員&役員だより」の令和7年4月号：「花よりも 花を咲かせる 土になれ」：著作権をめぐって・・・では、安原代表理事は、野球指導者の山下智茂氏の名言である「花よりも 花を咲かせる 土になれ」に追句をした「花よりも 花を咲かせる 土になれ そは追いかける わが夢にして」により、自らの思いを表現されるとともに、著作権の抵触の有無、取り扱いに対しての留意、さらに、オリジナリティの必要性に言及されていると受け取りました。

この“たより”を読んで思い出したのは、曲名と歌詞の一部を変えて、旋律を踏襲して作成した下記の替え歌です。この替え歌を作ったきっかけは、2011年東北地方太平洋沖地震による津波被害（下記の写真参照）に学び、将来の南海トラフ巨大地震などに対する減災方法の一つとして、多様な粘り強さを持つ盛土の活用に関する調査・研究の取組みです。その過程で感じた思いを「もりど（守土）の歌」に託しました。この替え歌の原曲は、右側に併記した「あざみの歌」（昭和24年、1949年）［作詞：横井弘、作曲：八洲秀章、歌手：伊藤久男］ですが、私は倍賞千恵子さんの歌唱が気に入っていました。

もりど（守土）の歌

山には山の　滑（すべ）りあり
海には海の　津波あり
どこにするのか　ふるさとに
畏れ備えて　憂いなく

ちから任せの　守りより
秘めたる粘りの　強さから
津波に耐える　その姿
盛土に深き　わが想い

いとしき盛土　汝（な）はDry（ドライ）
こころの支え　汝は盛土
さだめの津波は　はてなくも
守れよせめて　わが国土

2012.12
常田賢一

あざみの歌

山には山の　愁（うれ）いあり
海には海の　悲しみや
ましてこころの　花園に
咲きしあざみの　花ならば

高嶺の百合の　それよりも
秘めたる夢を　ひとすじに
くれない燃ゆる　その姿
あざみに深き　わが想い

いとしき花よ　汝（な）はあざみ
心の花よ　汝はあざみ
さだめの径は、果てなくも
香れよせめて　わが胸に

津波で壊滅的に破壊された海岸堤防：山元町

津波の越流に耐えた河川堤防：井土浦地区

押し波と引き波でも表層侵食に留まった道路盛土：浪板地区

押し波でも表層侵食に留まった河川堤防：井土浦地区

上記の替え歌の 1、2、3 番の歌詞に託した思いは、それぞれ下記（一部修正）です。

1）海岸には津波の脅威があり、高台移転で山地部に逃れたとしても、そこには山津波と呼ばれる土石流、盛土のすべり崩壊といった別な脅威がある。そのため、安全で安心できる生活場所、故郷は、どこなのか、どこにしたらよいのかと迷うことになるが、いずれの場所でも、自然の脅威を謙虚に受け止め、然るべき備えを行い、心配、憂いを少しでも減ずることが必要である。

2) 津波により壊滅的な被害を受けた防潮堤は、力任せとも言える高機能、高コストの人工構造物として再構築され、それにより海岸が保全されることは確かである。他方、盛土は相応の防潮性と防潮堤には無い固有な性能を保有しているため、単なる土盛でなく、想像以上に粘り強く、今次の津波でも井土浦地区、浪板地区の盛土は津波の越流に耐えていた事実があり、そこにヒントを見出して、盛土の活用に想いを寄せる。

3) これまでの調査・研究により、津波時の盛土は不飽和（ドライ）状態であるが故に、難浸透性により侵食がし難く、粘り強いことが明らかであり、それを確信し、研究の拠り所、支えとしているが、将来において地震、津波が宿命、言い換えれば、定めである我が国、日本において、津波防潮構造として整備し、活用される盛土が、国土を守り続けてほしいと願う。

ここで、直感的に分かると思いますが、曲名の“守土：国土を守る”は“盛土”も意図しています。

なお、上記の替え歌とその思いは、出版した下記の書籍の「あとがき」に掲載してあります。

常田・秦：東日本大震災の津波の被害から学び 粘り強い盛土で減災，理工図書，264p．2016.4

さらに、原曲に対して曲名、歌詞の一部を変えて、旋律を踏襲した替え歌が、どう著作権に係るかが気になりますが、レコードとして売り出して商売することはせずに、内々で楽しんでいる範囲では問題ないのではないかと思います。例えば、市中で提供されるカラオケの場において、「あざみの歌」を選曲して「もりどの歌」を歌っても、利用料は支払うので問題はないと言えるでしょう。

上記の“思い”を発展させると、会員の皆様も同様と思いますが、技術者として従事する業務について、成果を学術的、技術的な報告、論文にした対外的な発信には慣れているものの、背後にある“思い”の発信はほぼ皆無ではないでしょうか。例えば、技術講習会は客観的な技術提供の場であり、講演会は講師の思いを言葉で伝えることはできますが、その言葉は記録されない限り、残らないと言えます。

さて、“思い”を広く伝え、残せる有効な手段は、ドキュメンタリー報道、テレビドラマ、映画、小説など（下記の【参考】参照）がありますが、身近な方法では、安原代表理事が披露されている俳句、短歌などに託すこと、本号で取り上げた替え歌、さらには新たな作詞・作曲もあるかもしれません。

将来、AIなどの影響が危惧されるデジタル情報化社会にあって、土木分野の存在、土木事業の意義、さらに、土木技術者の“思い”を国民に伝える、インパクトがある手段、工夫が必要と思います。このような背景の下、「LRRI 会員&役員だより」「LRRI技術資料」は会員の皆様の“思い”が頂ける場なので、一層活用頂くとともに、更なる“思い”の場づくり、発信をお願い致します。

【参考】黒部の太陽　＊ウィキペディア（https://ja.wikipedia.org/wiki/黒部の太陽）から抜粋

小説：木本正次による、1964年の毎日新聞の連載小説。同年、毎日新聞より小説化。

映画：監督/熊井啓、出演者/三船敏郎・石原裕次郎、製作/三船プロダクション・石原プロモーション、公開/1968年2月。劇団民藝の全面協力の下、三船プロダクション、石原プロモーションと関西電力が共同製作。関西電力、熊谷組、鹿島建設、間組、佐藤工業、大成建設、ブルトーザー工事、日本国土開発、旭ヘリコプター、小松製作所、愛知県豊川市の協力の下で製作。　企業タイアップ映画の先駆けとされる。

テレビドラマ：1969年8月～10月の日本テレビ系列で全11回の連続ドラマなど。

（2026.3.11：2011年東北地方太平洋沖地震から15年、LRRI：顧問、常田賢一）